

審査の結果の要旨

氏名 一柳智紀

本論文は、小学校での話し合いを中心とした授業に焦点を当て、教室談話の特徴による児童の聴取内容およびその聴き方の相違を教師ならびに児童の参加のあり方から分析検討し考察している。論文は5部9章から構成されている。

第1部第1章では、教室談話に関する先行研究を整理し、児童の聴取内容と聴き方が教室談話に位置づけられて考察されていない点を指摘し、6点の分析すべき課題を具体的に導出し、聴くことを他者の言葉に媒介された内的対話として捉えるバフチンの対話論を分析の理論的基盤として述べている。第2章では、聴く行為を捉える研究方法を整理し、分析課題に応じて、授業観察、直後再生課題、内容理解テスト、聴くことへの教師調査ならび半構造化面接法を組み合わせた、本論文全体の研究方法が論じられている。

第2部第3章では、聴くことが苦手と担任教師から認識される1名の児童の発言の12時間の観察による質的分析から、話し合いの流れを捉えていない点と話し合いを志向していない点を導き出している。そして第4章では、同学年2学級10時間の授業観察の分析から、聴くことが苦手とされる2名の児童の、知識共有型、理解交流型という異なる課題構造における聴き方の相違を、彼らの発言の特徴から明らかにしている。

第3部では、授業観察に加えて直後再生課題を用いることで、教師評定による聴く能力の高・中・低群間での相違を、授業中発言しない児童も含めて検討している。第5章では同学年2学級を対象に、高群児童が他群に比べて言い換え、要約、発言者名の記憶といった聴き方をしていること、ただし知識共有型と理解交流型と言う課題構造、学級による教師のリボイシング方法が児童の聴き方の相違に影響を与えることを示している。第6章では、知識共有型授業での教師の聴くことへの支援を検討し、リボイシングの差異が児童の再生や内容理解に影響を及ぼすことを指摘している。また第7章では、理解交流型授業での教師の支援を検討し、リボイシングだけではなくテキスト参照や他児発言への言及に関する支援を行なっていることを明らかにしている。

第4部8章では、第2部で取り上げた学級の2年間の時系列比較により、小学校高学年でテキスト引用や他児発言への言及などに加え、自らの言葉で能動的に統合して推論し聴くことが習得されていくことを明らかにしている。そして第5部9章では、論文を総括し、本研究の意義と今後の課題を論じている。

本論文は、聴くという行為に焦点を当てることで、非発言児童も含めて授業の文脈や状況と児童の理解とのダイナミズムを記述した点で独自性が高い学術論文であり、授業研究に対する新たな視座を提示した論文であると評価された。よって本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに十分にふさわしい水準にあるものと判断された。